

表紙をよむ

芥川 喜好

絵というものの不思議について、しばしばお話ししてきたように思います。

ひとことで言えば、平面というぺらぺらの二次元世界だからこそ、あらゆる空間表現が、現実も非現実も、想像も幻想も妄想も含めて可能になるという不思議です。

ぺらぺらの平面が、人間の想像力にはたらかせて、優に一つの世界、一つの宇宙に匹敵する空間を生み出す面白さ、と言いかえてもいいでしょう。

絵をどう見るかということは、そうした絵の空間に自分なりにどう入っていくかということ、ほとんど同義だとも言えます。

早川俊二さんの絵画もまた、その意味で類のない空間体験をさせてくれる世界です。

そこにあるのは、コーヒーミル、湯呑み、小さな壺、機械油差しといった、身の回りのものたちです。もう一つの系列は女性のいる空間です。



「女性正面(ローズの服)」
2004年 キャンバスに油彩
65×54cm

気がわいています。そのなかにゆっくり立ちあがるように、ものが姿をあらわします。

ことさらにそこに「在る」という形ではない。しつくりと空間とともにある、自然な形態です。むしろそれゆえに、存在することの不思議を、その玄妙な奥深さを、訴えかけてきます。

擦れあう空気の内にはらまれるほのかな光と温かみが、この人の絵にはある。いつの間にかそこに入りこんで、一緒に絵の空気を呼吸している感覚になってくるのです。

いい作品には必ずどこかに入り口がある、ということに改めて思います。そういう生きた空間を手に入れるために、三十年もの間、早川さんはパリで試行を重ねてきました。

十四歳で初めて渡欧したときは、古画の模写でしようか、ぐらいの心づもりだったといえます。しかし、西欧絵画のもつ厚みと空間の深さに打ちのめされて、軽い気持ちにはたちまち吹き飛んでしまいます。

改めて美術学校に入り直し、二十代はデッサンに、三十代は自分自身の絵の具を製作することに没頭したのです。

近代以降、日本における絵画は、欧米から流れこむ新しいスタイルを追って目まぐるしく様相を変える、お手軽な「モード」としてあったとも言えます。流行は商業主義とも結

びついて、多くの画家を渦のなかに呑みこんでいった。死屍累々の観すらあります。

パリにとどまったということは、つまり、そういう底の浅い世界を捨てて、もつと長い目で絵画の根元を見定める道を選びとったということでしょう。

レンブラント、ファン・エイク、ミケランジェロらの歴史的な作品を間近に見ながら、その高い精神性と、ものとしての確かな肉體性を、自分自身の目標に見据えてきた。長い年月をかけた絵の具の研究も、むろんそのためだったわけでは

現代にあつて、これほどの長い射程をもつ作家はまさに稀有といえるべきです。

このところ自作絵の具の使い方にも習熟して、今年早々に開いた個展では、めざましい空間の深まりと空気の伸びやかさが見られました。画面全体に潤滑油が行き渡り、画格が回り大きくなりました。

飛躍の予感がするのです。

(読売新聞編集委員)

早川 俊二(はやかわ しゅんじ)

— 画家 —



一九五〇年長野県生まれ。七四年渡仏。七六年パリ国立美術学校に入学、彫刻家マルセル・ジリに師事。八三年ギャラリ・エチエンヌ・ドゥ・コーザンス、メゾン・デ・ボザールにて個展。その後独自の絵画表現のために絵の具の研究に入りすべての発表をやる。九二、九三年アスキエア人形ギャラリで日本初個展。九四年以降ほぼ毎年アスキエア神田ギャラリで個展、デッサン展。



「風景へ(コーヒー挽き、砂糖壺)」
2004年 キャンバスに油彩
50×50cm

たとえばコーヒーミルのある最新作。細かいタッチを重ねてつくられる堅固な絵肌の内側から、さわさわと粒子がささめくような空

絵というものの不思議について、しばしばお話ししてきたように思います。

ひとことで言えば、平面というぺらぺらの二次元世界だからこそ、あらゆる空間表現が、現実も非現実も、想像も幻想も妄想も含めて可能になるという不思議です。

ぺらぺらの平面が、人間の想像力にはたらきかけて、優に一つの世界、一つの宇宙に匹敵する空間を生み出す面白さ、と言いかえて、もいいでしょう。

絵をどう見るかということは、そうした絵の空間に自分なりにどう入っていくかということと、ほとんど同義だとも言えます。

早川俊二さんの絵画もまた、その意味で類のない空間体験をさせてくれる世界です。

そこにあるのは、コーヒーミル、湯呑み、小さな壺、機械油差しといった、身の回りのものたちです。もう一つの系列は女性のいる空間です。

たとえばコーヒーミルのある最新作。細かいタッチを重ねてつくられる堅固な絵肌の内側から、さわさわと粒子がささめくような空気がわいてきます。そのなかにゆっくり立ちあがるように、ものが姿をあらわします。

ことさらそこに「在る」という形ではない。しっくりと空間とともにある、自然な形態です。むしろそれゆえに、存在することの不思議を、その玄妙な奥深さを、訴えかけてきます。

擦れあう空気の内にはらまれるほのかな光と温かみが、この人の絵にはある。いつの間にかそこに入りこんで、一緒に絵の空気を呼吸している感覚になってくるのです。

いい作品には必ずどこかに入り口がある、ということを改めて思います。そういう生きた空間を手に入れるために、三十年もの間、早川さんはパリで試行を重ねてきました。

二十四歳で初めて渡欧したときは、古画の模写でもしようか、ぐらいの心づもりだったといいます。しかし、西欧絵画のもつ厚みと空間の深さに打ちのめされて、軽い気持ちにはたちまち吹き飛んでしまいます。

改めて美術学校に入り直し、二十代はデッサンに、三十代は自分自身の絵の具を製作することに没頭したのです。

近代以降、日本における絵画は、欧米から流れこむ新しいスタイルを追って目まぐるしく様相を変える、お手軽な「モード」としてあったとも言えます。流行は商業主義とも結びついて、多くの画家を渦のなかに呑みこんでいった。死屍累々の観すらあります。

パリにとどまったということは、つまり、そういう底の浅い世界を捨てて、もっと長い目で絵画の根元を見定める道を選びとったということでしょう。

レンブラント、ファン・エイク、ミケランジェロらの歴史的作品を間近に見ながら、その高い精神性と、ものとしての確かな肉体性を、自分自身の目標に見据えてきた。長い年月をかけた絵の具の研究も、むろんそのためだったわけです。

現代にあって、これほどの長い射程をもつ作家はまさに稀有というべきです。

このところ自作絵の具の使い方にも習熟して、今年早々に開いた個展では、めざましい空間の深まりと空気の伸びやかさが見られました。画面全体に潤滑油が行き渡り、画格が一回り大きくなりました。

・・・飛躍の予感がするのです。

(読売新聞編集委員)

ロータリーの友 2004年(平成16年)5月号 VOL.52 NO.5 掲載